

「大津宮跡と近江神宮」

3丁目 井守徳弘

●予定コース

近鉄高の原駅(8:42)―近鉄京都駅―JR京都駅―JR膳所駅―京阪膳所駅―京阪別所駅(10:10)―柿本人麻呂歌碑―大津市歴史博物館前―弘文天皇陵―新羅(しんら)善神堂―皇子が丘公園(昼食)―近江大津宮錦織(にしこうり)遺跡―皇子山古墳(階段105段)―近江神宮―大伴黒主神社―榎木原(はんのきはら)遺跡―福王子古墳―南滋賀町廃寺跡―京阪南滋賀駅―京阪膳所駅―JR膳所駅―JR膳所駅―JR京都駅―近鉄京都駅―近鉄高の原駅 (約9km・午後5時30分ごろ解散予定)

●柿本人麻呂万葉歌碑(大津市市役所時計塔下)

歌碑建立 昭和42年(1967)

さ々なみの 志賀の大わだ よどむとも 昔の人に 亦も逢はめやも

巻1-31

(さ々なみの志賀の大わだは、今このように淀んでいても、昔の人にまた逢えようか。)

柿本人麻呂の父母等は未詳。生年も未詳であるが、大化元年(645)前後と見る説が多い。制作年の明らかな最初の歌は持統三年(689)の草壁皇子挽歌(2-167～170)などがある。持統天皇譲位後の文武四年(700)四月、明日香皇女(天智天皇の皇女。新田部皇女と同母)薨去の際、挽歌をなす(2-196～198)。この歌が制作年の明らかな人麻呂最後の歌であるから、689年～700年位まで活躍した、後世、山部赤人とともに歌聖と呼ばれ、称えられている。万葉集には、人麻呂作歌72首、および柿本朝臣人麻呂歌集を出典とする歌28首、計100首がある。

そのなかで、近江の歌は、

- ・楽浪(さざなみ)の志賀の辛崎幸(さき)くあれど
大宮人の舟待ちかねつ(1-30)
- ・楽浪(さざなみ)の志賀津の子らが罷(まか)り道(じ)の
川瀬の道を見れば寂(さぶ)しも(2-218)
- ・近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのにいにしへ思ほゆ(3-266)
- ・楽浪(さざなみ)の比良山風の海吹けば釣りする海人(あま)の
袖返る見ゆ(9-1715)

などがあります。

●大津市歴史博物館

大津市歴史博物館は、数多くの文化財を収集、保管、調査研究し、広く公開することを目的に、平成2年に開館しました。

常設展に今日のテーマである「大津京」があります。

天智2年(663)、日本は百済を救援するため朝鮮半島へ出兵した。しかし、日本軍は白村江(はくすきのえ)の戦いで唐・新羅(しらぎ)連合軍に大敗し、日本はいつ唐軍に攻められるかという緊迫した状況を迎える。

こうした東アジアの情勢の下、天智6年(667)、天智天皇によって飛鳥から近江への遷都が行なわれる。大津京の誕生である。国の中心となった大津京では、初の戸籍「庚午年籍」の編成などの政治改革が進められた。しかし、天智10年(671)、天智天皇が崩御すると、翌年大友皇子と大海人皇子との間で壬申の乱が起こり、乱後再び飛鳥へと遷都される。大津京はわずか5年余りの都であった。

●穴太遺跡の特殊カマド(オンドル遺構) 大津市歴史博物館前

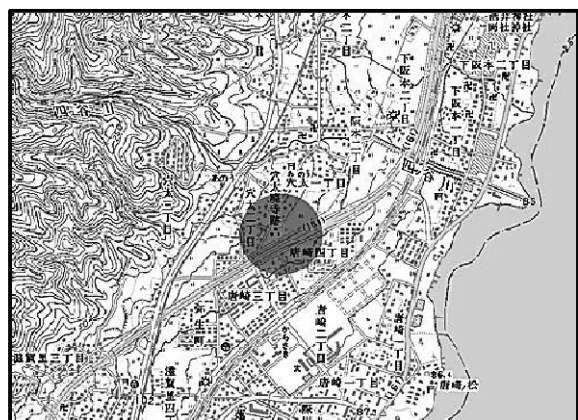
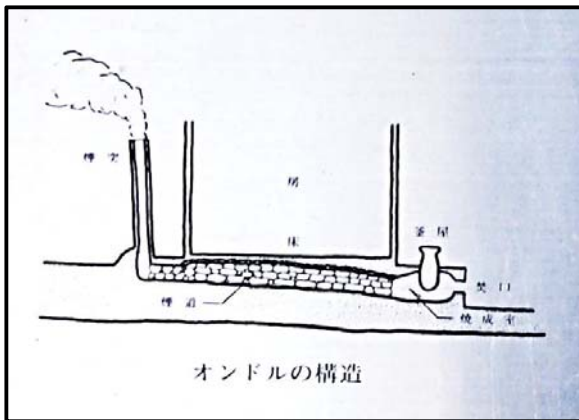
JR湖西線唐崎駅の西方、比叡山山麓にひろがる穴太遺跡で発見された特殊カマド(オンドル遺構)です。一緒に出土した遺跡から7世紀前半に造られたものです。

このカマドは、焼成室(カマド本体)、煙道からできていました。その中で焼成室には、粘土を貼り、煮炊き用の土器を支える石が置かれていました。一方、煙道は石組で焚口に向かって左側に付き、なだらかに傾斜して延び、約2mで右に折れ、さらに延びていました。

石組には、煤がついており、火を受けたことがよくわかります。

この遺構は後世に削られて、上部の構造はわかりませんが、石で蓋をし、その上に建物が建てられていたと思われます。

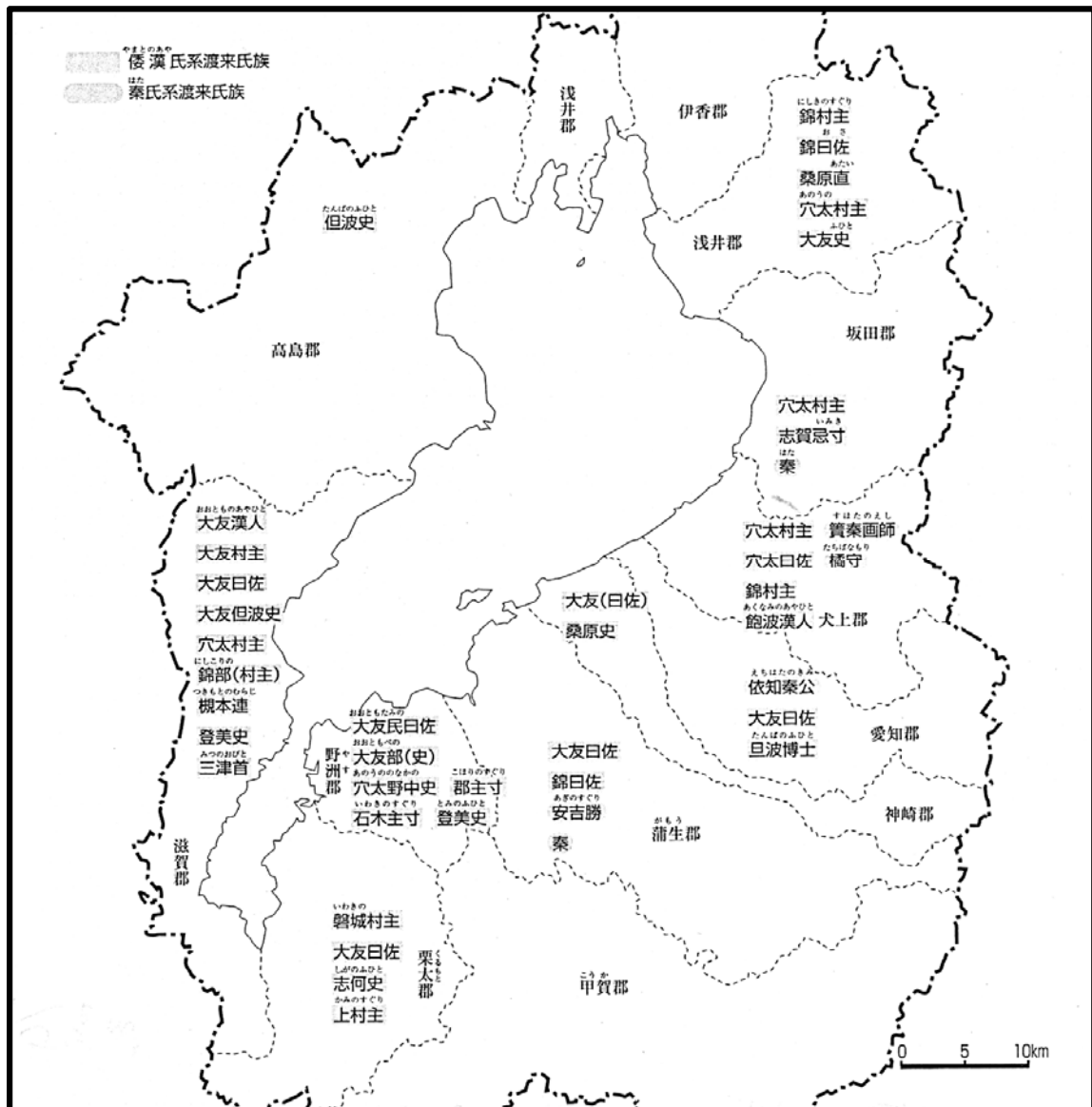
穴太の地は、古くから渡来人の関係の深いところであり、この遺構は朝鮮半島で見られる床暖房のオンドル(温突)とかんがえられます。(案内板)



この他に滋賀県には野田道遺跡(蒲生郡日野町)、柿田遺跡(長浜市)にもオンドル遺構があります。

薬師遺跡(石川県小松市)、観覚寺遺跡(奈良県高取町)、西新町遺跡(福岡市)などにも出土しています。

●近江の渡来人



有力な渡来氏族は、応神天皇の時に来日した、阿知使主(あちのおみ)を祖とする倭漢直(やまとのあやのあた)氏と、弓月君(ゆづきのきみ)を祖とする秦造(はたのみやつこ)氏で、大和政権の中枢に登用されていた。

近江国滋賀郡を本拠とする漢人村主系が大きな勢力をもっている。

近江の漢人村主は当初から多くの氏族に分かれていたのではなく、最初は志賀に居住する漢人として、志賀漢人と呼ばれていた。

9世紀以前の文献記録に見える近江の居住氏族のうち30%強を渡来系氏族が占めていたようである。((財)滋賀県文化財保護協会田中勝弘)

●弘文天皇陵

弘文天皇(648-672)は天智天皇と采女の宅子娘(やかこのいらつめ)との皇子の友友皇子です。

天智天皇が671年12月3日、近江宮で崩御(46歳)されると、皇位継承をめぐって叔父である大海人皇子と、壬申の乱で争い25歳で悲惨な最期を遂げました。勝利した大海人皇子は、飛鳥に遷都して天武天皇となりました。

大友皇子は『日本書紀』には立太子や即位の記述はありません。しかし、明治3年(1870年)に弘文天皇と追号されて天皇として認められました。

『日本書紀』では壬申の乱の終盤、672年7月22日の瀬田橋での敗戦の後、「大友皇子は逃げるところもなくなった。そこで引返して山崎に身を隠し、翌日7月23日、自ら首をくくって死んだ」とあります。

この山前が現在のどこであったかは諸説あり、

①近江国滋賀郡の長等山とする説(江戸後期の国学者伴信友、江戸中期の国学者谷川士清、幕末明治時代の国学者飯田武郷)。

②河内国茨田郡三矢村山崎(枚方市三矢)とする説(江戸時代中期の儒学者並河誠所、江戸時代中期の尾張藩士の国学者河村秀根)。

③河内国交野郡郡門(こうず)とする説(幕末明治期の国学者敷田年治)。

④山城国の山崎(現大山崎)とする説(古事類苑の編集者三浦千畝、郷土史家の大西源一)などがある。

④の山城国の山崎(現大山崎)とする説が有力である。

これは、「7月22日に大和の別將たちが北上して山崎に至り、河の南に集結した」と『日本書紀』にもあり、地理的に一番妥当なのは大山崎の地であろう。

ここ陵墓は死地である「山前」の名をとって長等(ながら)山前陵と命名され、現在にいたっています。

●新羅(しんら)善神堂(国宝)

智証大師(円珍)が唐に留学して、天安二年(858)唐から帰国の船が暴風雨に翻弄されている最中に新羅明神が現われ「我は新羅明神なり、汝のため護法の神とならん」と約束したことから、三井寺北院の現在地に860年、新羅明神を祀る祠を建てたのが起こりです。内陣須弥壇には平安時代後期に造られた木造の新羅明神像(国宝)が安置されています。

現存の建物は貞和3年(1347年)、足利尊氏の寄進によるものです。

源頼義(平安時代中期の武将。河内源氏初代・源頼信の嫡男で河内源氏二代目)が三男の義光をこの神の前で元服させ、義光はそれ以来「新羅三郎」(1045～1127)と呼ばれるようになりました。

長兄は八幡太郎義家、次兄は賀茂次郎義綱とそれぞれ元服した神前由来する名を有しています。

義光は弓馬の道にすぐれ、後三年の役(1083～87)には、長兄の義家を助けるため奥州へ出向いて、清原氏の欄を兄に協力して治めています。

源氏一門は数多いが、武門の棟梁、源氏の大將と称される有力なもの、名流とされるものの多くは頼義を祖としている。

代表的な子孫としては、長男八幡太郎義家からは、源為朝、源頼朝や源義経、源義仲の他、後の新田氏の祖となる源義重や足利氏の祖となる源義康といった源氏の代表的な武将が輩出される。

また、次男賀茂次郎義綱からは、美濃や河内などに石橋氏を輩出している。

また、三男新羅三郎義光からは、嫡男の源義業(よいなり)の子・佐竹昌義を祖とする佐竹氏、義業の弟源清光の子からは武田信義を祖とする武田氏やその弟加賀美遠光の子・小笠原長清を祖とする小笠原氏が輩出されている。

●皇子が丘公園(昼食)

面積は約15.1ヘクタール。管理・運営は大津市
高台の上にあり、公園からは琵琶湖や大津市街の景色を見渡すことができる。
公園はサクラの名所として知られている。ソメイヨシノのほか、早咲き種のハツミョザクラも植えられている
この地は、第二次世界大戦終戦直後には在日米軍の住宅地として使用されていたが、米軍の撤退後に大津市が公園として整備されました。

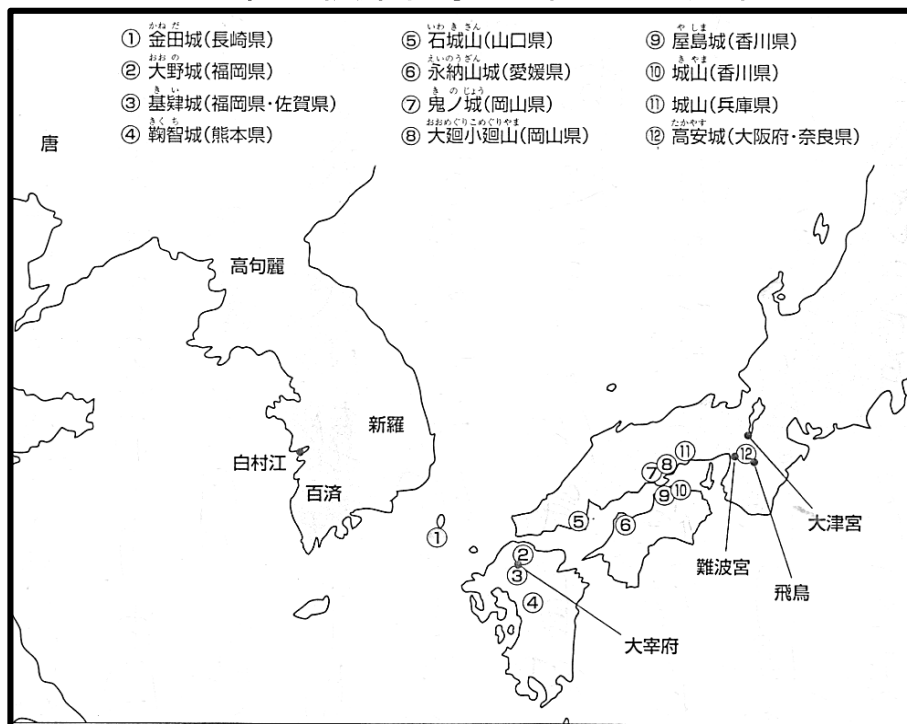
●近江大津宮錦織(にしこうり)遺跡

大津宮は激動のじだいでのみやこであった。当時の日本は東アジアの国際的規模での緊張のなかに置かれており、中国大陸の唐、朝鮮半島の高句麗、新羅、百済、それに倭と称した日本との関係は一触即発の状態にあった。

激動の発信地は朝鮮半島である。長く三国に分かれていたものが、まず、660年に百済が、ついで668年に高句麗が滅亡し、新羅が統一に成功した。この間に起こったのが663年の白村江の戦いであり、戦争の当事者は攻める新羅と守る百済だったが、これに唐と日本が関与したのである。

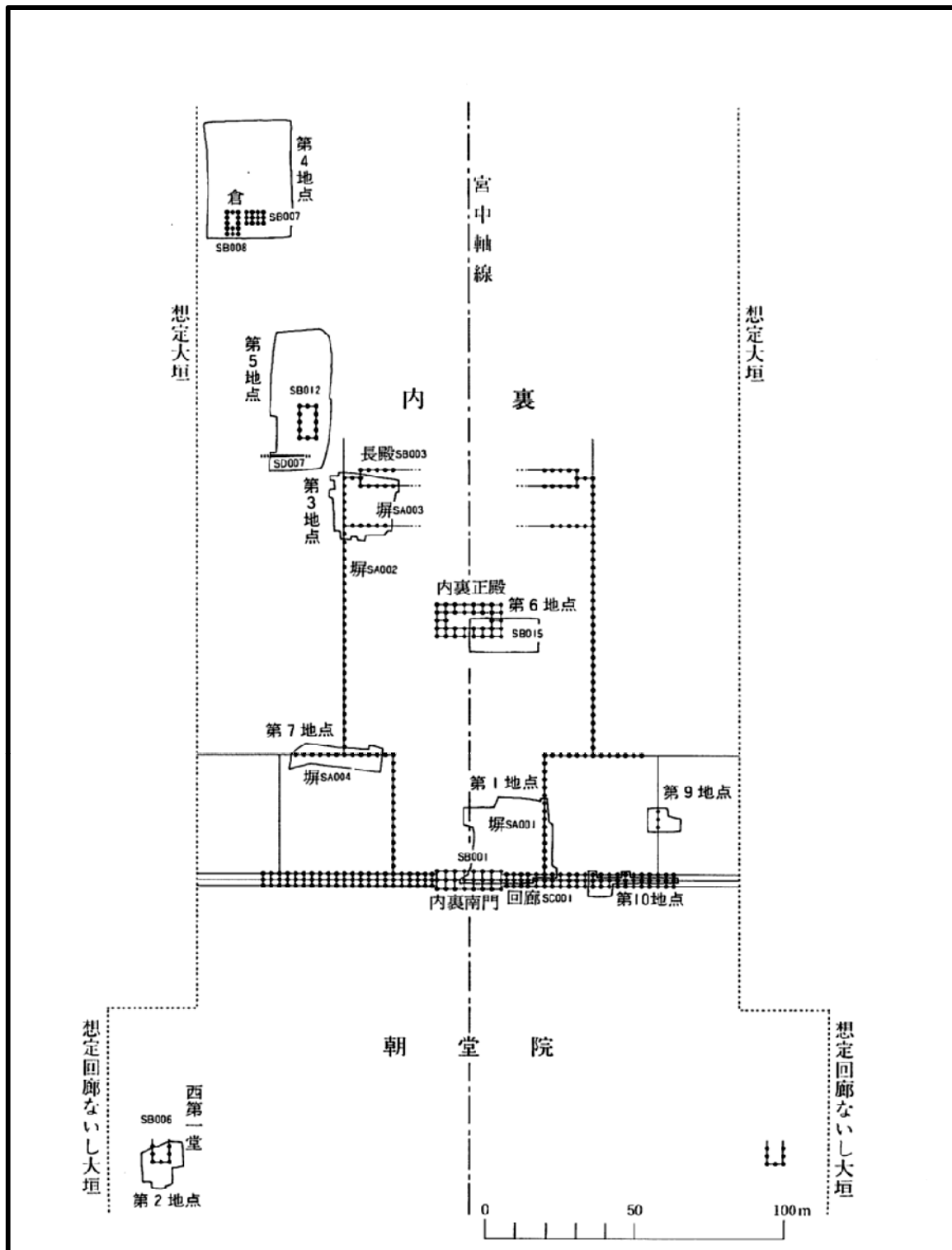
もともと百済と日本は同盟関係に近い友好国であったので、国家としてはすでに滅亡していた百済ではあったが、その復活をめざす百済の要請を受けて援軍を派遣する。一方の新羅は強大な唐の援助を受けており、百済・日本の連合軍と、新羅・唐の連合軍とが白村江で対戦するところとなった。戦争は、百済・日本軍の完全な敗北に終わり、余勢をかる新羅・唐の攻撃を受ける可能性が出てきた。そこで、九州・瀬戸内海に多くの山城7を築いて侵攻にそなえ、さらに首都を大津に移して国家の防衛を固めようとした。667年の大津宮の建設には、このような国際的背景があったのです。遷都の翌年の668年正月に執政していた中大兄皇子は天智天皇として即位されました。

7世紀の朝鮮半島と日本山城の分布



王宮としての建物名が『日本書紀』に出てくるのは、
天智天皇7年(668)1月7日、群臣を召して「内裏」で饗応されたとあり、
大津宮に内裏が建築されていたことがわかります。
天智天皇7年7月、「濱臺(はまのうてな)」の下に魚が、水が見えないくらい
集まったとあり、臺(うてな)とは四方を眺めるために建てられた高い建物の
ことで湖岸に建てられていたと思われる。
天智天皇8年(669)12月、「大蔵」に出火があったとあり、朝堂院の一角の
大蔵に火災が発生したことを記しています。
天智天皇9年(670)1月7日に「宮門」の中で大射(年中行事で弓を射る)を
行なったとある。内裏南門の中でしょうか。
天智天皇10年(671)4月25日には「新臺(あたらしきうてな)」に漏尅(ろこく)
を置くとある。漏尅は水時計であり、近江神宮本殿横に復元されています。
天智天皇10年5月5日に天皇は「西の小殿」で宴(うたげ)をされています。
天智天皇10年10月17日、天皇の病が重くなり、東宮(皇太子の大海人皇子)
「内裏の仏殿」の南で頭髪をおろし、沙門(ほうし)となり、吉野に入られた。
天智天皇10年10月23日、大友皇子は「内裏の西殿」、の仏像の前にいた。
天智天皇10年10月24日、近江宮に火災があった。「大蔵省の第3倉」より
出火した。
天智天皇10年(671)12月3日、天皇は近江宮で崩御された。11日に
「新宮」で殯(もがり)をした。
この年(天智天皇10年)に宮中の「大炊寮」の8つの鼎(かなえ、釜)がひとりで
鳴った。(不吉の兆し)
以上のような諸建物が『日本書紀』に見え、宮都の整備の進展がたどれる。
天智天皇の崩御に続いて起る壬申の乱で大友皇子の自縊(じい)とともに
廃都となる。したがって近江大津宮は5年余という短期間の宮城であり、
宮城内の諸施設の建設は記録に見えるものの、関連諸建物の建設や條坊
の施行については全く記事を見ないだけに、実質的な整備は不明である。

大津宮中枢部復元図と遺構検出地点



錦織(にしこうり)という地名は朝鮮半島から渡来した機織り集団に因んだ地名とされている。

大津京の復元(『大津市歴史博物館』展示案内より)

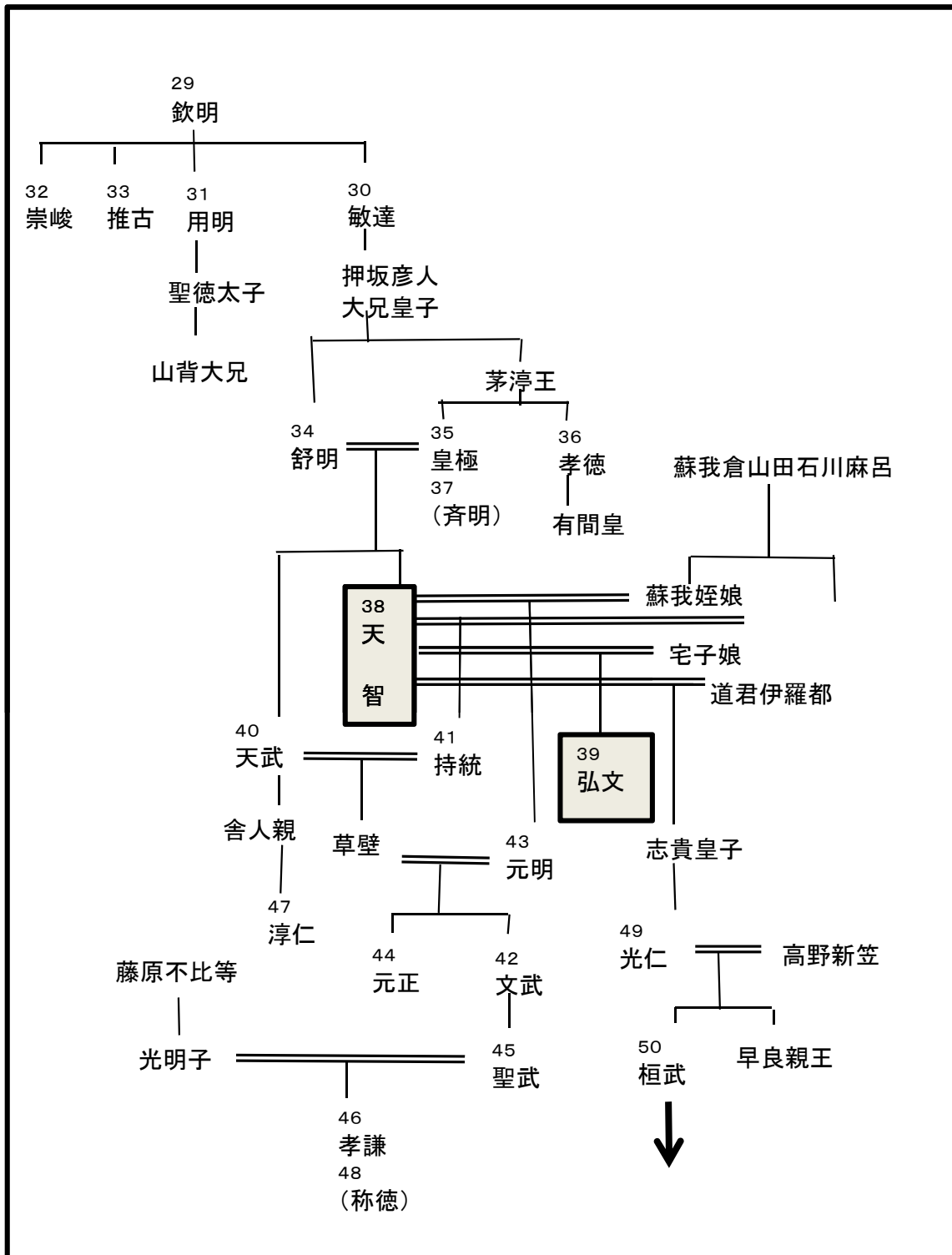


天皇の居所の内裏と、政務をとる朝堂院からなる大津宮を中心に、北には穴太廃寺・崇福寺・南滋賀町廃寺、南には園城寺前身寺院がある、仏教色の濃い都でした。この4ヵ寺は、宮の防衛拠点でもあったと考えられています。

大津京の発掘は、昭和3年(1928)、同13～14年の2度の発掘調査で、まず天智天皇が667年に建立した崇福寺の遺構と、同時代の大寺とみられる南滋賀廃寺が発見されました。その後、昭和49年以降、錦織で宮殿の門や建物とみられる掘立柱跡が発見され、また昭和59年には、京城の最北に位置するとかんがえられる穴太廃寺が発掘されて、大津京の全貌が次第にあきらかになりつつあります。

大津京の東側すぐ際まで湖水が来ていたと考えられています。

天皇系図



●皇子山古墳(国指定史跡)

昭和45年(1970)の発掘調査によって二基の古墳を確認されています。

皇子が丘公園の北の皇子山(164m)頂上にあります。4世紀後半に築かれた大津市内最古の古墳で、国指定の史跡です。

全長60m、後方部一辺長35m・高さ6m、前方部幅28m・高さ4m、二段構築の前方後方墳です。墳丘は復元されたものです。

墳丘には葺き石が施されていたようで、琵琶湖に面した部分は特に丁寧に造られています。埴輪の出土はなく、墳丘に埴輪の配列はなされていませんでした。

主体部は後方部に10m×7mの大きな墓坑と、重なるように3基の墓坑が、前方部にもう一つの墓坑と粘土槨が見つかっています。5人が葬られていることになります。

一号墳の東斜面上に直径20mの円墳である二号墳が築かれ、その年代は一号墳と相前後する時期と推定されている。

前方後方墳は、古墳の墳形の一種であり、特に東日本の前期古墳に多く存在する。また、中国・四国地方にも多く存在し、中でも出雲地方の前方後方墳は古墳時代を通じて築かれていました。

琵琶湖をめぐる古墳は、古墳時代前期からほぼ全域にできており、日本海地域から入ってきたものと思えます。(添付資料参考)

●宇佐山古墳群・13号墳

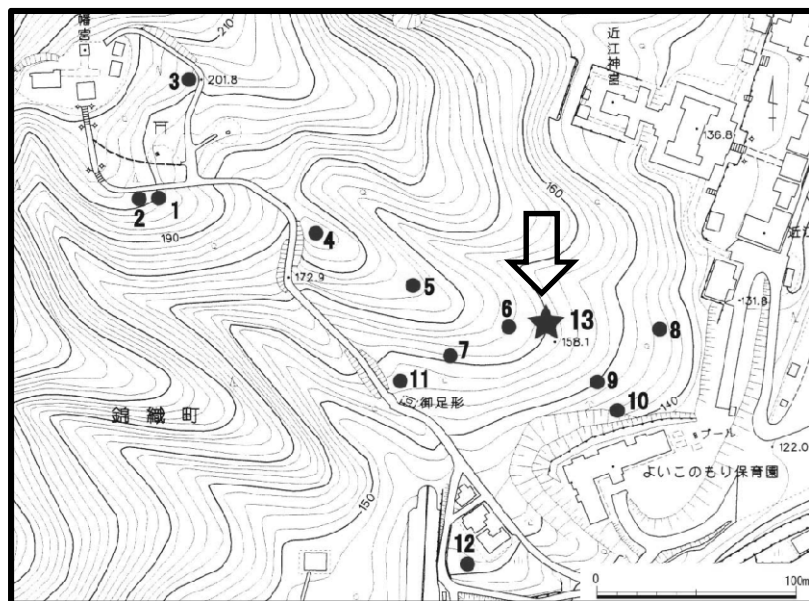
宇佐山古墳群は、宇佐山の東斜面に古墳時代後期(6世紀)の円墳などが13基がある遺跡です。今回、砂防工事が計画されたため発掘されたものです。宇佐山古墳群は弥生時代中期から平安時代にかけての遺跡であることがわかりました。

平成22年4月から発掘され、新たに発見された古墳の宇佐山13号墳が平成22年7月に現地説明会が行われました。

この宇佐山13号墳は古墳時代中期前半頃(5世紀前半)の築造とみられ、石棺には完全な状態で主体部(埋葬施設)が確認され、さらに、中に納められていた埋葬された人物の頭骸骨が残されていました。

宇佐山古墳群分布図

(大津市教委編)



●宇佐山古墳群13号墳 主体部 箱式石棺



13号墳は地表面の観察では墳丘の盛り上がりはまったくなく表土層を除去したところ、3m×2mの土坑状遺構が検出され、掘り進めると古墳の主体部が発掘されました。

墳丘は、もともと低く、後世に流されたものと考えられます。

墳丘規模は、主体部西側4m(斜面上方側)にある幅3mの浅い周溝と東側7m(斜面下方側)にある墳丘裾部とみられる段差がその範囲を示すと考えられることから、東西は13m、南北は20m(推定)と思われます。

東西約3m、南北約2mの墓坑(棺を納めるための穴)に板状の石材を組み合わせてつくった箱式石棺が納められています。箱式石棺は内法で長さ158cm、幅24～36cm、高さ30cmの規模で、頭側の幅を広くして、西の宇佐山側に頭部を、琵琶湖側に足を向けるようにつくっています。

天井には4枚の蓋石をのせています。

石棺には側石・蓋石ともに内面に赤色顔料が塗られています。顔料の種類は分析を行っていませんが、朱(硫化水銀)もしくはベンガラ(酸化第二鉄)と思われます。真っ赤に塗ることには、「魔よけ」などの意味があるとされています。

石棺内の西側から被葬者の頭蓋骨が現れました。石棺の規模と頭蓋骨の位置から仰臥伸展葬(ぎょうがしんてんそう:仰向けで足を伸ばした状態)と推定されます。

古人骨に詳しい、片山一道(かずみち)京都大学名誉教授(理学博士)に頭蓋骨出土状態で肉眼鑑定したところ、被葬者は壮年～熟年前半(20～40才代)の男性とみられ、身長は155cm前後と推測されます。やや小柄な感もするものの、古墳時代当時の平均身長(約162cm)からすると、とくに背が低いということではないとのことです。

被葬者の左足側にあたる棺外に鉄剣数振り・鉄鏃数点・砥石が副葬されていました。石棺の中からは副葬品は出土しませんでした。

土器がまったく出土しておらず正確な年代については不明ですが、副葬されていた鉄鏃の型式や、類似する高島市打下(うちおろし)古墳(5世紀代の箱形石棺)の年代観から、中期前半(5世紀前半)頃と推測されています。皇子山古墳は、13号墳より古い古墳時代前期の首長墓。13号墳は、このような首長のもとにいた地域の有力者が葬られた古墳と考えられています。

●近江神宮

近江神宮は第38代天智天皇をお祀りしています。
皇紀2600年を記念して昭和15年(1940)に創祀されました。
天智天皇7年(667)が当地に近江京を営み、飛鳥から遷都されました。
天智天皇が日本で初めて水時計(漏刻)を設置した歴史から境内には各地の時計業者が寄進した日時計や漏刻などを飾っており時計館宝物館が併設されています。

近江神宮境内と歌碑



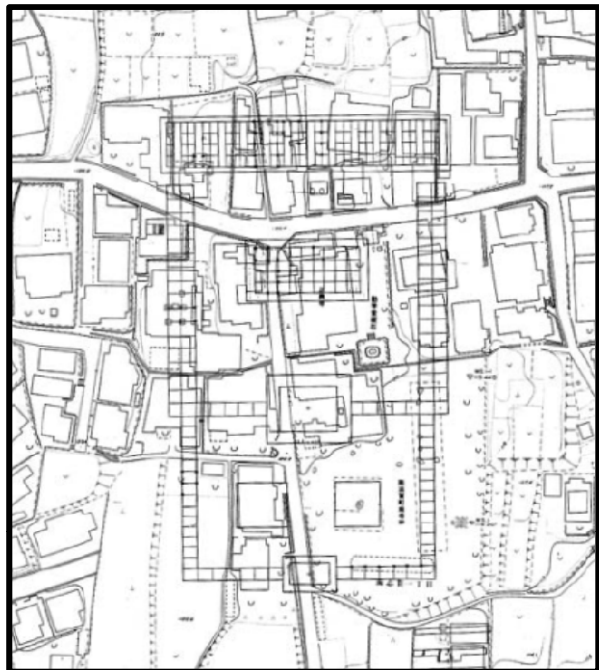
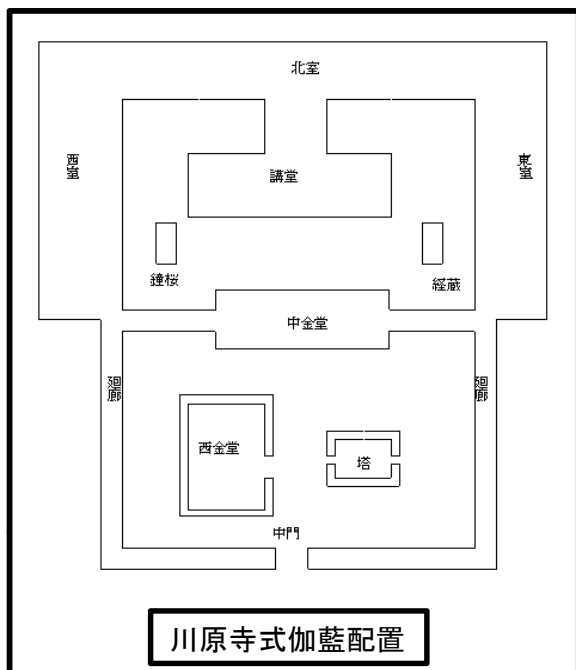
- (1) 芭蕉句碑
から崎の松は花より朧にて
- (2) 天智天皇御製
秋の田の刈穂の庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつゝ
- (3) 横井時常(第2代宮司)歌碑
歳神は今帰らすか左義長の青竹はぜて高く燃え立つ
- (4) 平田貫一(初代宮司)歌碑
比叡ヶ嶺に近く琵琶湖を目下に大神の辺に永世住まなむ
- (5) (右) 香川進
湖ほとに息づき比そめと波はいひは留けく可奈志と波はまたいふ
- (左) 山村金三郎
湖に音なき音を韻かせて比良ゆ流るる夕茜雲
- (6) 保田與重郎歌碑
さざなみのしがの山路の春にまよひひとり眺めし花盛りかな
- (7) 春日真木子歌碑
人間の智恵のはじめよひそひそと秘色の水に刻まあたらし
- (8) 伊藤香舟女句碑
楼門に湖脈打てる望の月
- (9) 桂樟蹊子(霜林俳句会主宰)句碑
漏刻の音とこしへに初日影
- (10) 高市黒人歌碑
楽浪乃 国都美神乃 浦佐備而 荒有京 見者悲毛
さざなみの くにつみかみの うらさびて あれたるみやこ みればかなしも
- (11) 柿本人麻呂歌碑
淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努爾 古所念
あふみのうみ ゆふなみちどり ながなけば ころもしのに いにしへおもほゆ
- (12) 吟友の碑(大友皇子御製漢詩「宴に侍す」)
皇皇明日月と光り 帝徳天地に載す 三才並に泰昌 万国臣義を表す

●南滋賀町廃寺跡(国指定史跡)

大津京関連遺跡の一つ。昭和3年(1928)と16年の発掘調査で、南門、金堂、講堂が南北に並び、塔と小金堂が向かい合う川原寺式の伽藍配置を確認。また出土遺物から7世紀後半の白鳳時代から平安時代末期まで存在していたことが判明。現在公園内に礎石の一部が残る。

調査の際には多数の瓦や土器が出土しており、その中にはこの地でしか見られない蓮華を横から見た文様で飾られた方形軒瓦もある。これらの遺物等から、白鳳時代から平安時代末頃までこの寺院が存在していたことが明らかになった。

この廃寺跡から約300m西の地点で、この寺で使用した瓦を焼いた瓦窯群の榎木原(はんのきはら)遺跡が見つかった。



南滋賀町廃寺跡平面図



方形軒瓦(サソリ文瓦)

●榎木原(はんのきはら)遺跡

昭和49年から53年にわたる西大津バイパス建設にともなう発掘調査で、白鳳時代から平安時代にかけての瓦生産遺跡であることが判明した。この遺跡は、笥(型)によって粘土から瓦を形づくる作業をする工房と、それから乾燥させた後で焼成する瓦窯とで構成されている。焼成した瓦は、すぐ東方の南滋賀町廃寺で使用され、一部は崇福寺へも供給されたものとみられる。

瓦窯は、白鳳時代の登り窯5基、奈良時代末から平安時代中ごろの平窯5基が入り交って3群をなしている。登り窯では、「サソリ瓦」と通称されている蓮華文方形軒瓦や複弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦・丸瓦・平瓦などが焼かれている。平窯では、流雲文で飾る軒瓦や鬼瓦、丸瓦・平瓦などが焼かれた。この瓦窯群のうち最も遺存状態の良好な登り窯1基は、バイパス建設で現地保存が困難なため、そっくり切り取り、原位置から北方約25mのバイパスと主要地方道下鴨大津線の間で斜面に移して保存されました。

●大伴黒主神社

大伴黒主は大友皇子(弘文天皇)の皇子で大伴姓を賜った大友与多王の子孫と伝えられる。

大友与多王は園城寺(三井寺)の開基とされる伝承的人物。大友の名は、当地の旧名滋賀郡大友郷に由来する。

大友氏はこの大友郷を本貫とする氏族で、黒主も滋賀郡司をつとめたことがあって、「滋賀の黒主」とも称されていた。また園城寺(三井寺)の神祠別当職をつとめた。

黒主は平安初期の代表的歌人で、いわゆる六歌仙の一人として知られている。延喜17年(917)宇多天皇の石山寺参詣の際、

さざら浪 間もなき岸を洗ふめり なぎさよくば 君とまれかし

(さざ波が絶え間なく岸を洗っているようです。渚がきれいであつたならば、上皇がお止まりになって下さると思つてのことでしょうか)

と歌って大いに賞賛されました。

拝殿に今も大友姓の名札がいっぱいあり、子孫たちがお守りしている様子がみえます。

ただ、大伴黒主は六歌仙の中で唯一小倉百人一首に選ばれていない。

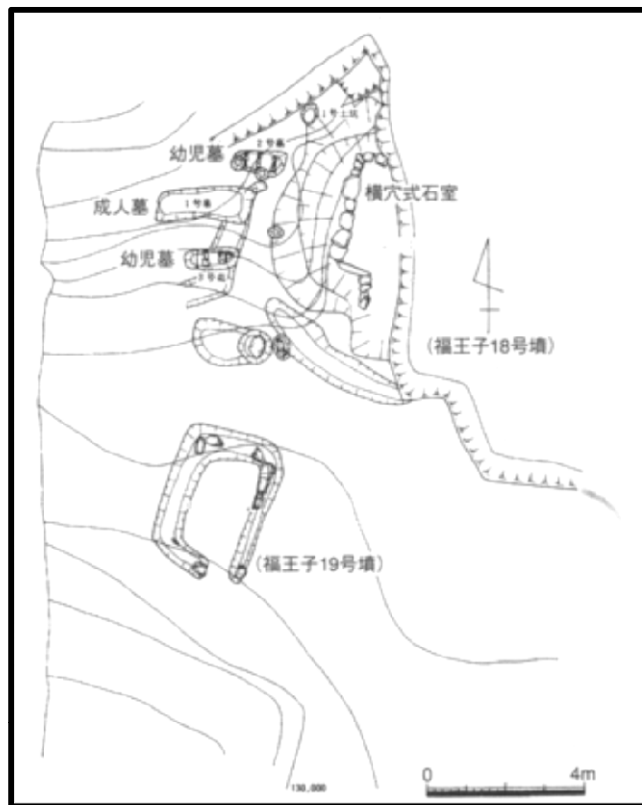
六歌仙は、『古今和歌集』の序文のひとつ「仮名序」において、紀貫之が「近き世にその名きこえたる人」として挙げた6人の歌人の総称。

僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、小野小町、喜撰法師、大伴黒主のこと。

●福王子古墳

福王子神社の境内にある古墳時代後期(6世紀後半)の群集墳。
この古墳群は横穴式石室をもつ15基の円墳からなる。発掘調査された7基は直径10m前後で、4基からミニチュア炊飯型土器が出土した。
石室が露出しており、今も見ることができる。

福王子18号墳



参考文献

- ・滋賀県史概説 滋賀県 昭和3年
- ・滋賀県上代・中世 滋賀県 昭和2年
- ・滋賀県文化財学習シート(遺跡編) 平成17年 滋賀県教育委員会事務局
- ・滋賀県文化財学習シート(史跡名勝) 平成16年 滋賀県教育委員会事務局
- ・図説大津の歴史上下 大津市歴史博物館市史編纂室 大津市
- ・古墳と寺院 田中勝弘 2008年 サンライズ出版(株)
- ・琵琶湖をめぐる古墳と古墳群 用田政晴 サンライズ出版(株)
- ・日本書紀 下 坂本太郎他 1984年 (株)岩波文庫
- ・日本書紀 下 宇治谷孟 昭和63年 1985年 (株)講談社
- ・Wikipediaフリー百科事典他

琵琶湖をめぐる首長墓の展開

		(湖北)		(湖東)		(湖西)									
時期	種別	須磨館	伊香郡	浅井郡	武井	松原・入江内湖	磯崎沼	田原川	大平内湖	蒲生郡	野洲郡	栗太郡	甲賀郡	滋賀郡	高瀬郡
			小坂(60)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)
			五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)	五村(20)



大津絵『鬼の寒念佛』